

秋田と伊勢商人（後編）

金見 紘征

（秋田大学 名誉教授）

はじめに

本稿の前編では、伊勢商人、特に江戸に進出した伊勢商人について紹介した。伊勢商人は江戸、大坂、京都の三都だけでなく、東日本一円に幅広く進出し、秋田における他国商人としては伊勢商人が最も多かった。今回の後編では、秋田における伊勢商人の系譜を紹介し、進出した時期、場所、業種、伊勢商人の出自、ネットワークおよび秋田との関係について考察を加えながら述べる。

秋田における伊勢商人のルーツ探索

当初、秋田の歴史書で読んだ伊多波武助^{いたばぶすけ}以外に伊勢ルーツの家は全く思い当たらず、何から手を付けたらよいか皆目見当もつかなかった。そんな時、菅江真澄のことを知り『菅江真澄全集』を購入し愛読していたので、その中に伊勢に関する記述や伊勢商人の大和屋が土崎港で活躍した記述があることに気づき、秋田には他にも伊勢商人がいたことを確信した。

調査の手がかりは、秋田魁新報社編『秋田人名大事典』にあった。「あ」の欄から順にすべてのページを調べ、何人かの伊勢関係者を見つけることができて、勇気付けられた。秋田県内の各市町村史も調べたが、商人についての記述は期待に反し少なかった。総じて執筆者が経済よりも政治により関心が強かったためと思われる。問い合わせのために秋田県内の電話帳をそろえ電話取材した際に、先祖は伊勢出身ですと聞く

と感激し、訪問して意気投合したこともあった。差し支えない範囲で古くからの親戚、菩提寺などを聞いた。伊勢商人同士が同郷のよしみで親戚になり、菩提寺も一緒である可能性が高いからである。苗字からの推測も有効で、伊勢側、秋田側に共通の苗字がないかを調べた。

秋田における伊勢商人の進出例

これまで調査して明らかになった秋田の伊勢商人リストを付表に示す。秋田の北から順に家名を取り上げ、それぞれの進出先と出身地、特記事項を示す。調査して明らかになった28件のうち、現時点で関係先に電話取材や訪問などができているものは24件、残りの4件は文献からの知見である。実地調査した具体例を取り上げ、付表番号を明記して説明する。

a. 大館の伊多波家 (No.2)

大館市岩瀬伊勢堂下にかつて伊多波武助の屋敷があった。秋田で著名な江戸時代の鉾山師で、秋田藩の鉾山政策にも関わった。秋田藩との交渉の便宜のため藩から土地を提供された別宅が土崎にあり、現在その跡に伊多波稲荷がある。秋田藩士による『石井忠運日記』にその活躍ぶりが記されている。1千石の高禄で藩士に取り立てられた新家武士（秋田藩で商人などから新たに武士に取り立てられた家）の第1号である。元は高橋姓で伊多波という苗字は、生まれ故郷の伊勢国多気郡波多瀬村（三重県多気町）の頭



文字をとって創作した苗字である。屋号を「松坂屋」と言い、松坂武助とも名乗った。その屋敷が大きかったことは、当時よほど印象深かったとみえ、^{ふるかわこしょうけん}古川古松軒の『東遊雑記』、高山彦九郎の『北行日記』、伊能忠敬の『測量日記』などの道中記にも記されている。彼のように秋田で複数例引用された人物は他にいない。

伊勢側の情報については旧波多瀬村を含む^{せいわ}『勢和村史』に詳しい記述がある。当時は故郷でも伊多波武助の活躍はよく知られていたが、紀州藩からは御用金を要求され挨拶に戻ってくることも強要された。また、後にたとえどんな証文が出てこようとも関知せずと、公然と借金を踏み倒されるなど、理不尽に不当な扱いを受けた。出身である波多瀬の何人かが伊多波武助の下で自営の商売(「自分稼」という)をしていたことがわかっているが、紀州藩では彼等の出国を10年の期限で認めていた。

大館に多くの伊多波姓があり、一族だけでなく手代別家もあったに違いないがまだ明らかでない。伊多波姓は創られた特異的な苗字であるため、全国のすべての伊多波姓は秋田がルーツであると思われる。松坂姓もあるが、こちらは文字通り松坂にルーツがあると連想できる。

当初、故郷における伊多波武助の足跡は全くわからなかった。筆者の父が伊多波武助のことを知らないのは地元の恥であるという趣旨の手紙を村長に出したことがきっかけで調査が進んだという経緯が『勢和村史』に記されている。

b. 角間川の地主家 (No.7)

大仙市角間川町には戦前まで住んでいた大地主の地主喜左衛門家があった。『地主氏系譜』(地主喜左衛門子孫所蔵)で事情がわかる。祖先は北畠家の武士で、北畠家が没落後に多氣郡相可(多氣町)で商売を始め、江戸時代中期には秋田の

横手、角間川に進出したが、多くの手代も相可近郊の出身であった。

系譜によれば、この地主喜左衛門家は2代目喜左衛門(1717年没)が1700年代初めに横手に出店し、ほぼ100年間、相可と横手の両店を経営していたが、次第に秋田側に重点が移っていった。やがて、相可店が手薄になり、それを手代の地主惣右衛門に任せて角間川に完全に移住し、仙北地方を代表する豪農の一人となった。

『大曲市史』には、かつての地主喜左衛門家宅に隣接する大地主の本郷吉右衛門家(No.9)の2代目である養子が、古江(多気町)の出身であると記されていた。その家譜によれば、3代目の妻は古江出身の地主三右衛門の娘であった。

秋田の地主姓を調べたきっかけは、このかなり特殊な苗字が相可にあることを知っていたため、関係があると直感したからである。『秋田人名大事典(旧版)』の地主姓の俳人の俳号が「多気庵」であるのを見つけて確信が持てた。

c. 大仙市長野の鈴木家 (No.10)

大仙市長野に、「秀よし」のブランドで知られる鈴木酒造店の鈴木松右衛門家がある。伊勢から持ってきた小さい荷車の蓋にしていた板が展示コーナーに飾ってあり、「寛文伍曆六月十二日伊勢射和^{いざわ}油屋長兵衛」と書かれている。初代(1688年没)は寛文5(1665)年という早い時期に進出しており、屋号の油屋から油商であったと推測される。酒造業の創業は元禄2(1689)年であり、当時の酒造りの方法を書いた資料が『秋田県酒造史 資料編』に集録されている。

時代は下って慶応元(1865)年、三重県員弁郡出身の星野友七(1917年没)が秋田藩に招かれて酒造業の発展に尽くした。彼は長野杜氏を育てて永住し、その顕彰碑が長野神社にある。秋田の酒造りと伊勢は深い関わり合いがある。

鈴木家が伊勢ルーツであることをインターネット検索で知り、鈴木酒造店を訪ねた。展示コーナーで「伊勢射和」の文字を見つけた時の感激は今も忘れられない。

d. 六郷の辻家 (No.12)

六郷（美郷町）の台蓮寺の中興の祖と言われる、24世住職の転誉上人（1802年没）は射和（松阪市）の出身で、『法蓮社記』の手記がある。それによると、上人の父である辻作右衛門は本家店があった横手で働き、その弟も角間川にあった本家の出店で働いていた。そして後年、父が祖父から譲り受けた六郷の家に住んで、池上（多気町）から養子を迎えた。

射和の辻姓は分流も多く、辻作右衛門家以前に六郷に進出した家もあった。辻長十郎家の初代、源右衛門の没年は元禄13（1700）年であるから、早い時期の進出である。射和出身の俳諧師、大淀三千風は『日本行脚文集』で、天和3（1683）年に六郷を訪ねた時、竹馬の友の加羽性龍がいてと言っている。

六郷は伊勢の御師、三日市太夫次郎家の仙北地方の拠点で加羽家が定宿であった。勤皇の志士である辻辰之助の家は「勢州屋」を名乗り、伊勢の御師との関係が深かった。

全15号の『六郷の歴史』は非常によくできた調査資料集である。その中で『法蓮社記』を見つかることができ、一気に調査が進んだ。

e. 角館の小林家 (No.13)

仙北市角館町に旧家の小林治右衛門家がある。その家譜によれば、北畠家の家臣であった中頭新左衛門家は北畠家の滅亡により禄を失い、江戸時代は在地の松阪市大黒田町で地士として処遇された。地士（じし）は紀州藩で制度化した身分で、在地で身分帯刀を許された者であった。

その弟の九右衛門が小林姓を名乗り角館に進出し、3代目の宗清（1720年没）から小林治右衛門家を名乗った。『角館誌』によれば、延宝3（1675）年に佐竹藩から御用金を割り当てられた町人は山田三郎右エ門・小林市兵衛・同与次エ門・同与七郎・伊勢治兵衛・同二郎左エ門・同助九郎・伊勢久左エ門の8名であった。山田姓、小林姓、伊勢姓のいずれも伊勢ルーツと推定できる。

小林家に関しては、松阪に帰省した時、旧家のルーツを調べている山際儀一氏から、角館に移住したということを知ってもらったのがきっかけである。

f. 横手の伊勢商人

横手には、富岡家、北岡家、村田家、荻田家などの伊勢商人が進出した。

大和屋と富岡家 (No.14)

相可に、かつての豪商の大和屋、西村三郎衛門家があり、初代が秋田と縁があった。菅江真澄が、川目（大仙市）の肝煎の高橋氏の系譜に関して、伊勢国相可の大和屋、西村三郎右衛門は15歳で秋田に来て伊勢には42歳で帰ったこと、男鹿の船川の港が整備されたのは彼の功績であること、土崎と大坂の米運送で巨万の富を得たことなどを記している。故郷に戻った西村三郎右衛門（1704年没）は豪商になり、江戸、京都に出店し、両替店、木綿問屋、紙問屋などを経営した。しかし、明治時代になって大名貸しが反故になって倒産した。

『土崎港町史』には、寛文5（1665）年に、雄物川河口の改修問題が起こった際、折よく訪れた伊勢の大和屋某と富岡某が川普請に精通しており改修工事を請け負ったが、すでに資料はなく、彼等がどのような素性かわからないとあった。ところが、相可在住の西村三郎右衛門家の



家譜には、三郎右衛門の子供、四郎右衛門(1713年没)は13歳になって秋田から相可に来て後に分家したとあり、また、四郎右衛門家の過去帳には、親戚筋として「出羽横手富岡氏」の夫婦の名前、戒名、没年日が4代にわたって記されていた。それらから、大和屋と連れ立って土崎に来た富岡某は富岡圓右衛門家初代道栄(1720年没)であったことがわかった。菅江真澄は富岡道栄のことを「福者」と称し、貞享元(1684)年に上宮太子(聖徳太子のこと)の神輿を寄付して祭礼式が行われたと記している。

富岡商店は横手きつての旧家で、味噌、醤油の製造を行い、ちよろぎ(シソ科の植物の根で秋田の特産)の漬物の発売元としてよく知られていた。江戸には大和屋の江戸店があり、富岡家には伊勢-江戸-秋田で連絡を取り合っていた手紙が残っている。他の家にしても伊勢と秋田はいかにも遠いが、江戸店のある関係者がいる場合が多かったため便利であったに違いない。

大和屋と富岡家のことは前述した文献調査でわかったことがきっかけである。両家の資料から詳しいことがわかったのは幸いであった。

北岡家(No.15)と村田家(No.16)

北岡市兵衛家は三重県明和町上村に現存する旧家である。その先祖は北畠親房^{きたばたけちかふさ}一族で、北岡姓を名乗った。分家した北岡市兵衛の初代(1735年没)は横手市二日町に進出し、「大和屋」を名乗った。初代と2代目が横手で商売をしたが、その後故郷に戻り、屋号を「仙北屋」とした。

村田善兵衛家の初代(1741年没)は北岡市兵衛家が横手に進出したときの仙北別家で、子孫が横手旧市内と増田町に現存する。

北岡家の系譜を書いた本『仙北屋の由緒』を読んだのがきっかけであるが、北岡家ではたまたま仏壇の整理をしていて、横手の光明寺の住職が記した忌日帳を見つけたとのことだった。

なお、当時「仙北」とは、仙北郡だけでなく、横手などを含むより広い地域を指していた。

荻田家(No.18)

多気町東池上の荻田長兵衛家は北畠家の家臣であったが、禄を失い、江戸時代は地士であった。屋号を「秋田屋」と名乗る。家譜によれば、2代目長兵衛(1775年没)が横手に進出し、2代目の弟である久兵衛が横手店を相続した。俳人の荻田汶水、幕末の商人の荻田久蔵、マンドリン奏者の荻田ヒサ子氏が子孫である。

北岡家の秋田での菩提寺が横手の光明寺であることがわかったので、伊勢商人との関係が深いと推測した。檀家の荻田家が伊勢ルーツであることがわかり、紀州藩の地土名簿で荻田姓を見つけたので当たりを付けた。

g. 浅舞の伊勢商人

横手市平鹿町浅舞の集落は伊勢商人が集中し、村田家、伊勢家、釜田家、中西家があった。

村田家(No.21)

浅舞で最も著名な商人として村田家があり、村田四郎治は新家武士に取り立てられた。子孫に詩人の村田光烈^{みつたか}がいる。浅舞の佐々木太治兵衛の伊勢参り道中記から村田家のルーツは相可であることがわかった。村田姓は相可で最も古い姓と言われ、伊勢神宮との関係が深い。江戸時代初期にはすでに山形県鶴岡に進出していた。

村田家のことを知ったきっかけは後述する今宿の小西久兵衛の家譜に、初代の久兵衛が初めて秋田に来た際、浅舞の村田家に逗留したことが記してあったからである。

伊勢家(No.22)

浅舞に「伊勢屋」を名乗る旧家の伊勢多右衛門家があり、酒造業を営み大地主であった。この伊勢家は私財を投じて貧民を救済した慈善事業家で、浅舞感恩講を創立した伊勢多兵衛とそ

の養子の伊勢胤守で知られる由緒ある家系である。過去帳から、先祖は伊勢土羽とば（多気町）の出身であることがわかる。伊勢家の忌日帳の初代の没年(1786年)から推定すると、初代は1730年代に秋田に移住したものと思われる。

寺田伝一郎『雪国小記』には、祭りの時の本町もとまちと覚町がくまちの若者衆の対抗について、「覚町の後立は村田本家、本町の尻押しは伊勢屋」と記されるなど、村田家と伊勢家はライバル関係にあった。浅舞で村田家を調査した際に旧家の伊勢家があることがわかり、伊勢出身と当たりを付けた。

h. 今宿、薄井の小西家

小西久兵衛家 (No.24)

雄物川の上流の今宿（横手市雄物川町）にある小西久兵衛家の玄関に「菅江真澄と小西久兵衛家」と題した標柱が立っている。菅江真澄は文政7(1824)年に地誌調査のため、肝煎の小西久兵衛家7代目である宮太郎の時に滞在した。

小西久兵衛家は今宿きっての旧家で、屋号を「朝田屋」と名乗った。その家譜によれば、初代の久兵衛(1702年没)は松阪市朝田の出身で、先祖は朝田彦大夫という伊勢の御師であり、代々、伊勢神宮に関連する仕事をしてきたとのことである。大正時代に伊勢の本家が絶家するまで伊勢との関係は続いた。朝田にある朝田寺には、明治時代に小西家先祖の戒名を男鹿の寒風石で彫った一族15家連名の墓石が残っている。その墓石の側面に「明治廿九年七月秋田市ニ於テ寒風石ヲ以改造ス」と記されている。

小西彦四郎家 (No.25) と楠家 (No.26)、山下家 (No.27)

小西彦四郎家は小西久兵衛の姉の息子、興久おきひさ(1738年没)が久兵衛の娘と結婚して薄井村（横手市雄物川町）に別家した家である。酒屋を営み、商人地主として発展した。もともと父

方先祖は楠木正成くすのきまさしげであり、小西彦四郎家5代目の時に由緒ある家であることを秋田藩から認められて、新たに楠家に復姓した家を立てて新家武士となった。その後、小西彦四郎家を名乗る家と楠家とが並立するようになった。一高寮歌「嗚呼玉杯に花うけて」を作曲した楠正一は楠家の子孫である。伊勢に移住した楠木正成の15代目、楠正具まさともの子孫は伊勢楠と呼ばれる。その系譜は『楠正具精説』に記されている。横手市大森町の山下家は伊勢楠の同族で、子孫にアラビア石油を創立した山下太郎がいる。

小西久兵衛のことは菅江真澄の地誌にも出てくるが、伊勢出身の記述はなかった。しかし、調べてみると今宿では小西家が伊勢出身であることはよく知られていたことがわかった。

i. 沼館の塩田家 (No.28)

沼館（横手市雄物川町）の塩田家も伊勢と縁がある。沼館城跡にある蔵光院の中興の祖である12代目の宥受法師ゆうじゆは伊勢出身で、実家の後継ぎがいなくなったので、新しく塩田家を立て、小西家に小柳家おやぎから来た4代目養子の兄弟、重安(1736年没)が継いだ。塩田家は商人地主に発展した。大正、昭和にかけて鉄道や銀行などを興した代議士の塩田団平が8代目である。

塩田家の由緒がわかったのは、今宿の小西久兵衛家の家譜に記されていたからである。

沼館八幡神社の神主、宮川家は伊勢の宮川のほとりの出身という伝承がある。沼館の宮川姓はその関係者である。

秋田への進出時期

秋田に伊勢商人が進出して定着したのは寛文時代頃からである。しかし定着する以前に様子見のように秋田に伊勢商人が行き来した。前編で紹介した松阪市射和の竹川家の家譜には、「呂



宋(ルソン)、秋田へ商を通す」とある。ルソン(フィリピン)と秋田を対比しているが、秋田はそれだけ遠いという意識があったのだろう。

また、同じく前編で紹介した松坂の小津家の家譜には、2代目、長継(1654年没)が「壮年の頃商用にて出羽に下り五、六年を経て帰郷し」とある。出羽というだけでは山形か秋田のどちらかはわからないが、新開地の東北地方で商いの修行をすることは珍しいことではなかったと思われる。壮年の頃とあるので江戸時代初期と推定される。

秋田の院内銀山は1600年頃に4人の武士により発見され採掘されたが、その中に伊勢出身の森次郎右衛門がいた。出入りの有力商人の57名中8名が伊勢出身であり、他国出身者の中では最も多かった。

江戸時代初期の『梅津政景日記』には、60件ほどの伊勢出身者の名がある。元和4(1618)年には射和の竹川家の3代目と推測される竹川喜兵衛が仲間とともに仙北に麻を買いに来たことが記されている。また、元和7(1621)年には「伊勢ノ久右衛門」が伊勢参りから戻ってきたことも記されている。したがって、江戸時代初期には秋田に伊勢商人が現れて、行き来していたことは明らかである。

その後、西村三郎右衛門と富岡道栄が土崎港の改修を申し出たのは寛文5(1665)年であるが、西村三郎右衛門はそれ以前に15歳で秋田に来ている。大仙市長野の鈴木家が進出したのは寛文5(1665)年である。角館の小林家の進出もその頃と推定される。伊多波武助、小西久兵衛などは元禄期であり、地主喜左衛門はそれより遅い。ほとんどが1750年頃までに進出しており、それ以降の新たな進出はほぼない。伊勢商人が最も盛んに江戸に進出したのは元禄期前後であり、地方進出も期を一にしている。

進出場所

他国者が移住しようとする際、どの土地を選ぶかは最大の悩みである。これまでに調べたところ、秋田では特に仙北郡、平鹿郡への進出が多く、なかでも伊勢商人は横手城下と浅舞に集中している。

横手の伊勢商人は、射和の辻家、明和町の北岡家と相可の村田家、相可の地主家、多気町の荻田家などである。横手は仙北地方の中心地であるため、秋田に進出するならまず横手に行こうということになったと思われる。射和から横手に進出した辻家は角間川、六郷に出店した。相可から横手に進出した地主家は角間川に出店し、後にそこを拠点とした。このように、ある家が拠点を作り、さらに支店を広げた例もある。

浅舞には相可近郊の多気町出身者が集中した。浅舞で最も有力な商人であった村田家と伊勢家、さらに、釜田家、中西家などである。彼らの出身地はせいぜい一里四方の範囲である。まるで故郷でも浅舞でも知り合いだらけのようである。

また、特定の一族だけが集中している場所もある。今宿の小西一族、六郷の辻一族、角館の小林一族などである。日本海に面した雄物川の河口の土崎港は秋田の商売の中心地で、諸国の商人が移住した。しかし、伊勢商人は多気町の田牧茂右衛門以外には見当たらない。米代川の河口にある能代港には伊勢出身と言われる村木家があるが、その他は知られていない。それらの土地には他に伊勢商人がいなかったのか、まだ見つからないだけなのかは、現状では判断がつかない。

業種

調査した限り、進出した当時の業種はほとんどわからない。どの家も系図、系譜は残っていても、商売に関する資料が全くと言っていいほ

ど残っていないからである。秋田に進出した伊勢商人は江戸に進出した伊勢商人とは違い、秋田には江戸のような購買力はないため、特定の商品のみを扱うのではなく、いわば扱える商品であればなんでも扱ったと思われる。伊勢商人は地場の商人とは違い、江戸、上方の事情に通じ遠方からの商品の流通にも通じていたと思われる。

特産品としては、秋田で伊勢茶の商いがされていたのは確かである。山形県酒田には射和の富山家が大々的に南伊勢の茶を出荷していた。射和に隣接する阿波曾（現松阪市）の浦城家は酒田に出店し、伊勢茶を扱い、秋田にも送り出していた。いなべ市の『藤原町史』から北伊勢の茶も秋田に出荷されていたことがわかる。

浅舞の伊勢家、今宿・薄井の小西家、大仙市長野の鈴木家などは造り酒屋である。酒造りには人数、資本、経験が必要であるが、伊勢では古来、伊勢神宮に奉納する神酒を製造していたことから、酒造りに手馴れていたものと思われる。浅舞の伊勢家、村田家、今宿の小西久兵衛家とその一族、角間川の地主家、本郷家などは商人から発展して明治期には大地主であった。

秋田では宝暦銀札騒動が起こり結果的に失敗に終わったが、有力商人が発行元になって銀札が発行されたことがあった。発行元として伊多波武助、小西久兵衛、富岡圓右衛門がいた。

前述のとおり、新家武士の第1号は伊多波武助であり、浅舞の村田家、薄井の楠家も後に新家武士になった。

伊勢商人の出自

筆者が調べた限り、故郷の伊勢の本家はその土地の有力者で、南北朝から戦国時代に伊勢国の支配者だった北畠家配下の武士であったと称する家が多い。しかし、彼らは江戸時代の政治体制の中で、正当に評価されていないという意

識があり、状況を打開するため、他所で活躍しようという意欲が強く働いたのではないだろうか。それなりの資力はある。さりとて、長男以外は分割できる土地はない。その家自体が他地方に進出するか、長男以外に資金などを支援して進出を手助けするかであった。食うや食わず、着の身着のままで流れ着いたという気配はない。ある程度の目算があり、準備して進出したと思われる。

实例をいくつか示す。横手に進出した明和町上村の北岡家は、北畠一族である。土崎港を改修した相可の西村家、その近所の荻田家などは地士である。角館に進出した小林家は松阪市黒田町の地士、中頭家の分家である。

興味深いのは伊勢商人と言えど松坂商人が中心であるが、秋田に進出した伊勢商人では相可を中心とした多気町出身者が圧倒的に多く、松坂出身者は意外に少ない。彼らの故郷は進出した場所より鄙びていたので、それだけ進出地に魅力を感じていたものと思われる。

伊勢商人のネットワーク

他所に行った際に同郷の者がいることは心強い限りである。特に、伊勢商人は同郷の者同士の結束が強かった。手代を同郷で固め、同郷同士で縁組するなどして結束を固めた。

同郷で固めた例を示す。横手、角間川に進出した地主喜左衛門家の手代で、地主分家を名乗った5人全員の付表に示した出身地の地名は多気町近郊である。ただし近郊とは言え、数キロメートルの範囲に広がっている。組織的に移住者を募ったものと思われる。

同郷同士の血縁の例を示す。相可から角間川に進出した地主喜左衛門は四疋田から浅舞に進出した中西九郎右衛門の娘と結婚している。角間川の大地主であった本郷吉右衛門家の2代目

養子は多気町古江の吉田家出身、3代目の妻は同じく古江出身で、横手在住の地主三右衛門の娘である。本郷家の手代、地主三郎兵衛も古江出身である。今宿の小西久兵衛家の分家、小西金六家の養子は山田出身である。

伊勢と秋田の関係

他所に進出して年代を経ると故郷との関係が疎遠となり、やがてどこが故郷なのかもわからなくなるのは世の常である。然るに、伊勢商人は故郷へのこだわりが極めて強かった。多くの家で故郷の菩提寺がわかっている。そして、進出後も何代にもわたって、伊勢、秋田の両方の菩提寺の過去帳に同じ戒名があることもしばしばである。たとえば4代目地主喜左衛門の故郷、相可の菩提寺の過去帳には赤字で「仙北喜左衛門」と書き込みがある。浅舞の伊勢家墓地には、故郷の本家と、一緒に浅舞に来た中西家の戒名を並べた大きな墓石がある。

また、進出して2、3代までは、家に跡取り息子がいない場合、極力、故郷の伊勢、また秋田在住の伊勢出身者から跡継ぎを迎えようとしている。秋田に進出してその後に故郷に戻った場合、秋田との縁で荻田家が秋田屋、北岡家が仙北屋などを名乗った。

伊勢と秋田の文化交流としては俳諧集への投句がある。延宝2(1674)年、松坂で刊行された『伊勢踊音頭集』に秋田人が15人投句しているが、東北地方では他は3名だけである。一方、延宝8(1680)年、能代で刊行された『八束穂集』では秋田以外の他国出身者の中では伊勢出身者が最も多かった。

さとうのぶひろ 佐藤信淵を師と仰いだ竹川竹斎は多くの佐藤信淵の著作を集めていた。それらの著作は大正時代になって彼の出身地である羽後町に寄贈された。秋田では国学研究が盛んで、本居大平の

門人が8人いた。本居宣長の木製座像が日吉八幡神社(秋田市)に安置されている。本居宣長を尊敬した平田篤胤は遺言により伊勢の方向を向いて埋葬された。このように、秋田の2人の偉人、平田篤胤、佐藤信淵と伊勢との縁は深い。

おわりに

これまで示したように、多くの松坂、多気商人が秋田に進出した。地縁、血縁を大事にし、故郷との関係を重視した。まだまだ多くの進出例があったに違いない。それらを調べて当時の伊勢商人の実態をより明らかにすることが今後の課題である。

本稿を終えるにあたり、これまでの調査に協力いただいた多くの関係者に感謝します。なお、伊勢ルーツに心当たりのある方、関心のある方は是非お知らせ下さい。

〈参考文献〉

- (1) 金児紘征『秋田の中の伊勢』(無明舎出版)(2017)
- (2) 秋田魁新報社編『秋田人名大事典』(1974)
- (3) 平凡社編『秋田県の地名』
- (4) 大城屋良助編『復刻東講商人鑑』(無明舎出版)(2006)
- (5) 平凡社編『三重県の地名』
- (6) 『南紀徳川史』(南紀徳川史刊行会)(1930)
- (7) 大西源一『北畠氏の研究』復刊(松阪郷土史料刊行会)(1982)(注:北畠家臣名簿を記載)
- (8) 金児紘征「菅江真澄と伊勢国」(『菅江真澄研究会誌』71号(2010))
- (9) 渋谷隆一編『明治期日本全国資産家・地主資料集成』(柏書房)(1984)(注:『日本全国商工人名録(第2版)』(1898)を含む)
- (10) 井上隆明『東北・北海道俳諧史の研究』(新典社)
- (11) 金児紘征「俳諧集からわかる伊勢と秋田の関係」(『松阪郷土文化会会報』52号(2021))

秋田の伊勢商人リスト

No.	家名	進出先/ (出身地)	特記事項
1	山本九郎左衛門家	鹿角市十和田毛馬内 (伊勢国)	初代没年：1663年、材木商で屋号「伊勢屋」 文献：「鹿角市史」第2巻下
2	伊多波武助家	大館市岩瀬 (多気町波多瀬)	初代没年：1772年、著名な鋤山師で屋号「松坂屋」 銀札発行元の一人で新家武士 史跡：能代市八幡神社、日吉神社に狛犬を寄進 文献：「みつがしわ4号」、「勢和村史通史編」 「石井忠運日記」（「第二期新秋田叢書」）
3	松坂家	大館市岩瀬 (伊勢国)	伊多波家と親密、一族か手代 子孫に秋田市の松坂古書店の元経営者
4	村木新三郎家	能代市旧市内 (伊勢国)	3人兄弟で伊勢から慶長年間（1596-1615）に能代に移住 廻船問屋で屋号「伊勢屋」 9代目村木息長は能代国学の指導者 文献：「村木氏系図」（秋田県公文書館）
5	根田家	男鹿市船越 (伊勢国安濃郡)	屋号「鶴屋」、鶴岡経由で移住 文献：磯村朝次郎「船越誌」
6	辻原家	大仙市旧大曲市内 (伊勢国)	史跡：大仙市本誓寺に大供養塔 文献：三森英逸「大曲のまちなみと住民の歴史」
7	地主喜左衛門家	大仙市角間川町 (多気町相可)	1700年代初頭には2代目が横手に出店、90町歩の大地主 別家：古江出身の地主三右衛門家（横手住）、地主五郎兵衛（横手住）、朝柄出身の地主藤右衛門（角間川住）、片野出身の地主弥右衛門（角間川住）、栃原出身の地主伊右衛門家（角間川住） 相可の地主家は江戸店持商人 史跡：浄蓮寺に1750年没の「俗名相可地主四郎右衛門」の墓石
8	田牧茂右衛門家	大仙市角間川町 (多気町片野)	地主喜左衛門家別家、秋田市土崎の廻船問屋 片野の田牧家は庄屋であった
9	本郷吉右衛門家	大仙市角間川町 (多気町古江)	2代目没年：1777年、450町歩の大地主で隣の地主喜左衛門と親密 2代目が古江の吉田家出身、3代目妻は古江の地主家出身 文献：「大仙市史」、史跡：国指定住宅（公開）
10	鈴木松右衛門家	大仙市長野 (松阪市射和町)	初代没年：1688年、1665年に移住、酒造業「秀よし」 「伊勢射和 油屋長兵衛」の板を展示、元禄時代の酒造資料あり 史跡：「星野友七顕彰碑」
11	能味家	大仙市内小友 (松阪市松ヶ崎町)	南部を経て寛永年間（1624-1644）に秋田に移住、陪臣、新田開発 1667年に松坂の句集「伊勢踊」に「六郷能味氏」が投句 文献：「陪臣家筋取調書」（横手市史 史料編近世Ⅱ）
12	辻家	美郷町六郷 (松阪市射和町)	辻長十郎家初代没年：1700年、射和の辻姓の数軒が進出 台蓮寺転誉上人は同族の辻作右衛門家出身 勤王志士、辻辰之助家の屋号「勢州屋」
13	小林治右衛門家	仙北市角館町 (松阪市大黒田町)	3代目没年：1720年、地土の中頭新左衛門家が本家 文献：「秋田県の地名」（平凡社）
14	富岡圓右衛門家	横手市旧市内 (伊勢国)	初代道榮没年：1720年、味噌醤油業で銀札発行元の一人 60町歩の大地主、相可の豪商、西村三郎右衛門家と親密 文献：金児紘征「菅江真澄からたどる伊勢と秋田の縁」（「出羽路」130号）、秋田市役所土崎出張所編「土崎港町史」



15	北岡市兵衛家	横手市旧市内 (明和町上村)	初代没年：1735年、屋号「大和屋」 故郷に戻り屋号「仙北屋」 秋田の手代の出身地は下尾村、上村、荒巻村、牧戸村、谷村 文献：中野イツ「仙北屋の由緒」
16	村田善兵衛家	横手市旧市内と 増田町(多気町古江)	初代没年：1741年、増田の旧「村田薬局」は随時公開 北岡市兵衛家別家、北岡家忌日帳に関連記事あり
17	小川家	横手市旧市内 (松阪市射和町)	代々医師、秋田城下に来て、3代目立庵が横手に移住 寛文年間(1661-1673)に陪臣、元祖は射和城主 文献：妹尾清「小川定雄先生とその家系について」(「横手郷土史料」 56号)、「陪臣家筋取調書」
18	萩田久兵衛家	横手市旧市内 (多気町東池上)	1750年頃進出、幕末の萩田久蔵とマンドリン奏者の萩田ヒサ子氏 は子孫、北畠家家臣で村林家の一族の地土、萩田長兵衛家が本家、 屋号「秋田屋」、本家の子孫の萩田保は戦後の著名自治省役人
19	北村彦左衛門家	横手市増田町 (松阪市西黒部町)	初代没年：1732年、化粧品店の「北村本店」 西黒部の地土、北村家は蝦夷交易も行った 横手市深井、浅舞にも進出 松阪市西連寺資料に関連記事あり
20	釜田家	横手市平鹿町浅舞 (多気町四疋田)	1751年には進出、染物屋 故郷の釜田三郎兵衛家が本家で現在も交流あり
21	村田四郎治家	横手市平鹿町浅舞 (多気町相可)	1700年以前の進出、70町歩の大地主 当初は相可の村田善三郎家が進出、後に村田四郎治家、新家武士 相可の宿屋に村田六郎治家があった 史跡：「村田家跡地」の碑
22	伊勢多兵衛家	横手市平鹿町浅舞 (多気町土羽)	初代没年：1786年、70町歩の大地主で田村姓を改名 慈善家として知られ、故郷の田村嘉左衛門家が本家 史跡：「伊勢多兵衛顕彰碑」、忠義な猫の館に「忠猫」の碑
23	中西九兵衛家	横手市平鹿町浅舞 (多気町四疋田)	屋号「大和屋」、故郷に戻る、四疋田の歓喜寺に「施主大和屋九兵衛」 の墓石がある、中西九郎右衛門家も進出
24	小西久兵衛家	横手市雄物川町今宿 (松阪市朝田町)	初代没年：1702年、屋号「朝田屋」 秋田の小西姓の本家で当初浅舞の村田家を頼った 銀札発行元の一、分家の小西全六家に山田(伊勢市)から養子 分家の小西八右衛門は80町歩の大地主 史跡「菅江真澄と小西久兵衛家」の標柱 朝田寺に秋田の小西一族が1896年に建立した墓石あり 文献：「萬重寶」(雄物川郷土史料 第30集)
25	小西彦四郎家	横手市雄物川町薄井 (松阪市朝田町)	初代没年：1738年、小西久兵衛の甥で80町歩の大地主 屋号「朝田屋」で元酒造業、伊勢堅紙所蔵 史跡：「小西家住宅」(国指定文化財) 文献：藤田精一「楠氏後裔楠正員精説」
26	楠家	横手市雄物川町薄井 (松阪市朝田町)	小西彦四郎家分家、元姓楠氏に復姓 新家武士、子孫に楠正一、その長男の楠宏氏は南極越冬隊長
27	山下家	横手市大森町 (伊勢国)	伊勢楠一党、子孫に山下太郎 史跡：「山下記念館」
28	塩田団平家	横手市雄物川町沼館 (伊勢国)	240町歩の大地主で今宿の小西久兵衛家と姻戚 8代目・塩田団平は代議士、史跡：「塩田団平」の碑

(注1) No.11は武家、No.17は医家

(注2) 文献のみの知見のものは、No.1、4、5、8